

『就実論叢』 第四八号 抜刷  
就実大学・就実短期大学 二〇一九年二月二十八日 発行

〈資料紹介〉

倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆歌稿（補遺）「鬱金の公孫樹」「初雪」「顔」  
「歌」（「黄なる花」）（二）解説

加藤美奈子

〈資料紹介〉 倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」

与謝野晶子自筆歌稿(補遺)「鬱金の公孫樹」「初雪」「顔」  
「歌」(黄なる花) (二) 解説

加 藤 美 奈 子 (生活実践科学科)

はじめに

本論叢第四七号掲載の拙稿「倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」与謝野晶子自筆歌稿(補遺)「鬱金の公孫樹」「初雪」「顔」「歌」(黄なる花)」(二) 解題・図版・翻刻」において、「薄田泣菫文庫」所収の与謝野晶子自筆歌稿を紹介した。

前稿では、「初雪」「顔」と題された詠草を含む、原稿用紙四枚の図版・翻刻を示し、解題を加えた。本稿では、短歌作品の初出、歌集・全集等への所収状況、表現・表記等の異同を示す。なお、【図版1】～【図版4】は前稿掲載の図版・翻刻に準じている。

一 凡例

前稿で示した歌稿順に初出・歌集、異同を示す。底本は、『定本 与謝野晶子全集』一～二〇巻(講談社、昭和五四～五六年)によつた(以下、『全集』)。表現・表記の異同を示す傍線は、引用者による(ルビの有無、異体字、踊り字(ゝ、ゞ)の異同は傍線は用いず、テキストで示すに留めた)。

ゴシック体で自筆歌稿の翻刻を示した(文字の修正箇所の記号、修正前の表現等は省略した)。「拾遺」は、『全集』により( )内に初出年を示している。歌番号は、「歌集」「拾遺」ともに、『全集』によつた。別の歌と判断されるものの共通する語句が見られ、初出

を同じくする「類歌」を（参考）として示した。

○【①】～【④】——「初出」の図版番号。後掲の図版【①】～【④】は、いずれも国立国会図書館のマイクロフィルム等からの複写によった。

〔初出〕の変体仮名によるひらがなは現行の表記に統一した。

〔大阪毎日〕——「大阪毎日新聞」

〔我等〕——雑誌「我等」（我等発行所、岩波書店）

・——初出掲載、歌集未所収歌。〔初出〕に初出紙・誌名を示す。

○——歌集所収歌。〔歌集〕に所収歌集・歌番号を示す。

なお、本稿掲載歌稿の多くの詠草を収録する歌集『さくら

草』（東雲堂書店、大正四年三月）は、晶子の「第十二歌集」

〔全集〕第三巻、五八六頁）である。

●——初出不明・歌集未所収歌。

二 与謝野晶子自筆歌稿「鬱金の公孫樹」「初雪」「顔」「歌」

〔黄なる花〕 初出・所収歌集、異同

〔図版1〕与謝野晶子自筆歌稿「鬱金の公孫樹」一〇首。

○秋風を思へるまゝになすとき水道橋の旗振り男

〔初出〕秋風を思へるまゝになすとき水道橋の旗振り男

〔大阪毎日〕（大正二年一月一日）「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕秋風を思ふまゝにもなす如き水道橋の旗振り男

〔「さくら草」339〕

・ある日ふと君が前後に三年ほど思ひし人の顔を繪に描く

〔初出〕ある日ふと君が前後に三年ほど思ひし人の顔を繪にかく

〔大阪毎日〕（大正二年一月一日）「鬱金の公孫樹」【①】

〔拾遺（大正二年）〕 378

○わが船の南の海に浮び居し日などの恋し鬱金の銀杏

〔初出〕わが船の南の海に浮び居し日などの恋し鬱金の銀杏

〔大阪毎日〕（大正二年一月一日）「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕わが船の南の島にかり居し日などの恋し鬱金の銀杏

〔「さくら草」334〕

○恋人は誰ぞ心に何おもふとしもこととふ秋の夕かせ

〔初出〕恋人は誰ぞ心に何おもふとしもこととふ秋の夕かせ

〔大阪毎日〕（大正二年一月一日）「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕恋人は誰れぞ心に何思ふかくものを問ふ秋の夕かせ

〔「さくら草」335〕

○秋の晝甘しと身さへ慄ふべき木の實の欲しとふと思ふかな

〔初出〕秋の晝甘しと身さへ慄ふべき木の實の欲しとふと思ふかな

〔大阪毎日〕(大正二年一月一六日)「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕 秋の晝甘しと身さへ慄ふべき木の實の欲しとふと思ふかな

〔「さくら草」 338〕

・何故にも思ふらんゆるびなく相思へりとかつ許しつ

〔初出〕 何ゆゑにも思ふらんゆるびなく相思へりとかつ許しつ、

〔大阪毎日〕(大正二年一月一六日)「鬱金の公孫樹」【①】

〔拾遺(大正二年)〕 379

○目にふとも君を思へる心見えしかもそぞろに涙くだりぬ

〔初出〕 目にふとも君を思へる心見えしかもそぞろに涙くだりぬ

〔大阪毎日〕(大正二年一月一六日)「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕 みづからの君を思へる心見えしかもそぞろに涙くだりぬ

〔「さくら草」 340〕

○かたはらに居て君思ふこのためでたげにして時に淋しき

〔初出〕 かたはらに居て君思ふこのためでたげにして時に淋しき

〔大阪毎日〕(大正二年一月一六日)「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕 かたはらに居て君思ふこのためでたげにして時にさび

しき 〔「さくら草」 341〕

○かにかくに人とことなる自らをおもむくままに行き通らしめ

〔初出〕 かにかくに人とことなる自らを向くままに行き通らしめ

〔大阪毎日〕(大正二年一月一六日)「鬱金の公孫樹」【①】

〔歌集〕 かにかくに人と異なるみづからをおもむくままに行き通らし

め 〔「さくら草」 336〕

●めでたかる他の國より来りつつ心にやがて覇となりしこと

〔初出〕 不明 〔歌集〕 未収録 \*『全集』未収録

〔函版2〕与謝野晶子自筆歌稿「初雪」一〇首

・赤い實が南洋のよなこちするその青の木の上の雪かな

〔初出〕 赤い實が南洋のよなこちするその青の木の上の雪かな

〔大阪毎日〕(大正二年二月二日)「初雪」【②】

〔拾遺(大正二年)〕 414

・末の子の病むかたはらを脱けいでし夜明に降れる師走の小雪

〔初出〕 末の子の病むかたはらを脱けいでし夜明に降れる師走の小

雪 〔大阪毎日〕(大正二年二月二日)「初雪」【②】

〔拾遺(大正二年)〕 415

・さがみのや城が嶋なる人來ると待つ日の朝のたわなる雪

〔初出〕 さがみのや城が嶋なる人來ると待つ日の朝のたわなる雪

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 416

・雪ふれば古錦繪の思はれぬ江戸の男女のはたおもはれぬ

〔初出〕 雪ふれば古錦繪の思はれぬ江戸の男女のはた思はれぬ

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 417

・東京へ赤きひとでの貝などを友の持てこし師走雪の日

〔初出〕 東京へ赤きひとでの貝などを友の持てこし師走雪の日

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 418

・雪の日や鼓を打てる家ありて番町かなし二階のかなし

〔初出〕 雪の日や鼓を打てる家ありて番町かなし二階のかなし

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 419

・雪の日は雨にまさらず青桐の幹むくつけくなりけるかな

〔初出〕 雪の日は雨にまさらず青桐の幹むくつけくなりけるかな

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 420

・椿の木おはぐる色をするゆゑに見じと思へるわが庭の雪

〔初出〕 椿の木おはぐる色をするゆゑに見じと思へるわが庭の雪

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 421

・雪ふれば子等のつくりし小だらひの池も初めて池こちする

〔初出〕 雪ふれば子らのつくりし小だらひの池も初めて池こちする

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 422

・菜の畑に降れる雪見て冬の日もいとなつかしきものと思ひぬ

〔初出〕 菜の畑に降れる雪見て冬の日もいとなつかしきものと思ひぬ

〔大阪毎日〕（大正二年二月二日）「初雪」【②】

〔拾遺（大正二年）〕 423

【図版3】与謝野晶子自筆歌稿「顔」一〇首

○うらさびしはかなしと云ふ言の葉を初めて文字にかくこちする

〔初出〕 うらさびしはかなしと云ふ言の葉を初めて文字にかくこちする

ちする（「我等」）（大正三年三月）「顔」【③】

〔歌集〕 うらさびしはかなしと云ふ言の葉を初めて文字に書くこち

ちする（『さくら草』） 21

○うつそみの世の物語してましとわれおとなしき願ひをつくる

〔初出〕 うつそみの世の物語してましとわれおとなしきねがひをた

てぬ 〔我等〕 (大正三年三月) 「顔」【③】

〔歌集〕 うつそみの世の物語してましとわれおとなしく君を思ひぬ

〔「さくら草」22〕

○恋ならぬ外の思ひのその中のもとも苦しき思ひなりけり

〔初出〕 恋ならぬ外の思ひのその中のもとも苦しき思ひなりけり

〔我等〕 (大正三年三月) 「顔」【③】

〔歌集〕 恋ならぬ外の思ひのその中のもとも苦しき思ひなりけり

〔「さくら草」24〕

●ただよそに生きてあるをば逢ふよりも文見むよりも嬉しと思へる

〔参考〕 逢はんとも文を見むとも思はずと云ひもて行けばただの唯

事 〔我等〕 (大正三年三月) 「顔」【③】

〔拾遺 (大正三年)〕 161

○いとせつになつかしけれど逢見むとさらに思はぬ人のまぼろし

〔初出〕 いとせちになつかしけれど相見むとさらに思はぬ人のまぼ

ろし 〔我等〕 (大正三年三月) 「顔」【③】

〔歌集〕 いとせちになつかしけれど逢見むとさらに思はぬ人のま

ぼろし 〔「さくら草」78〕

○恋ならねば初めもはてもなきことのはかなしやなどまどはるかな

〔初出〕 恋ならねば初めもはてもなきことのはかなきことに思はる

るかな 〔我等〕 (大正三年三月) 「顔」【③】

〔歌集〕 恋ならねば初めもはてもなきことのはかなきさまに思はる

るかな 〔「さくら草」109〕

●水仙に梅に似たらぬ思ひかな涙はこれも白く散れども

〔初出〕 不明 〔歌集〕 未収録 \* 『全集』 未収録

●二月の雨の中にて小鳥啼き阿子の歌へるあわただしさよ

〔初出〕 不明 〔歌集〕 未収録 \* 『全集』 未収録

○この人を寂しくせむと気の変る二三時頃の春の雨かな

〔初出〕 不明

〔歌集〕 この人を淋しがらそと気の変る二三時頃の春の雨かな

〔「さくら草」149〕

●かたはらに林檎光りて鳥うたひ二月の雨のふりもいづる日

〔初出〕 不明 〔歌集〕 未収録 \* 『全集』 未収録

〔図版4〕与謝野晶子自筆歌稿「歌」(「黄なる花」) 一〇首

・醒むる期も酔へる長さも悪人のわれは初めに知りなきな皆

〔初出〕 醒むる期も酔へる長さも悪人のわれは初めに知りなきな皆

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔拾遺（大正三年）〕 416

○子の叩く太鼓の音の中にしていしへの夢忘れかねつも

〔初出〕 子の叩く太鼓の音のなかにして古への夢忘れかねつも

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔歌集〕 子の叩く太鼓の音の中にしていしへの夢わすれかねつも

〔「さくら草」〕 251

○自らを慰め得ざるあはれなる末の日としもなりにけるかな

〔初出〕 自らを慰め得ざる哀れなる末の日としもなりにけるかな

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔歌集〕 自らを慰め得ざる哀れなる末の日としもなりにけるかな

〔「さくら草」〕 248

○霜降るや十一月に黄なる花咲く雑草のあはれなりけれ

〔初出〕 霜降るや十一月に黄なる花咲く雑草のあはれなりけれ

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔歌集〕 霜降るや十一月に黄なる花咲く雑草の哀れなるかな

〔「さくら草」〕 250

・くわと黄なる蝶の飛びきぬ病室の硝子障子の外のかなしさ

〔初出〕 くわと黄なる蝶の飛び来ぬ病室の硝子障子の外のかなしさ

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔拾遺（大正三年）〕 417

・夜も晝も傷ましきもの湧きいづる心は心誇はほこり

〔初出〕 夜も晝も傷ましきもの湧きいづる心は心誇はほこり

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔拾遺（大正三年）〕 418

○静かなる風のながれのこちよさ十一月の黒檀の夜

〔初出〕 静かなる風のながれの心地よさ十一月の黒檀の夜

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔歌集〕 静かなる風のながれのこちよさ十一月の黒檀の夜

〔「さくら草」〕 249

・恋人はかりそめごとを語らへる時にも二人死なんと思へる

〔初出〕 恋人はかりそめごとを語らへる時にも二人死なんと思へる

〔大阪毎日〕（大正三年一月二日）「黄なる花」〔④〕

〔拾遺（大正三年）〕 419

・わが鏡君を憎むとかすかにも慄ふ心を覗く目うつる

〔初出〕わが鏡君を憎むとかすかにも慄ふ心を覗く目うつる

〔大阪毎日〕(大正三年一月二二日)「黄なる花」〔④〕

〔拾遺(大正三年)〕 420

・わがために物を思へと君がため物を思へどはかなまぬかな

〔初出〕わがために物を思へと君がため物を思へどはかなまぬかな

〔大阪毎日〕(大正三年一月二二日)「黄なる花」〔④〕

〔拾遺(大正三年)〕 421

①「鬱金の公孫樹」(大阪毎日新聞)(大正三年一月二六日)

### 鬱金の公孫樹

與謝野晶子

秋風を思へるまゝ、になすとき水道橋の旗ふり男  
 ある日ふと君が前後に三年ほぎ思ひし人の顔を給にかく  
 わが船の南の海に浮び居し日なきの戀し鬱金の銀谷  
 戀人は誰ぞ心に何おもふともこもこふ秋の夕風  
 秋の蜜甘しと身さへ慄ふべき木の實の欲しとふと思ふかな  
 何ゆゑにも思ふらんゆるびなく相思へりとかつ許しつ  
 \* \* \*  
 目にふとも君を思へる心見ぬしかもそぞろに涙くだりぬ  
 \* \* \*  
 かたはらに居て君思ふこの事のためだけにして時に淋しき  
 \* \* \*  
 かにかくに人ごころなる自らを向くままに行き通らしめ

②「初雪」(大阪毎日新聞)(大正三年二月二日)

### 初雪

與謝野晶子

赤い實が南洋のよなごころするその青の木の雪かな  
 末の子の病むかたはらを脱いでし夜明に降れる師走の小雪  
 さがみのや城が嶋なる人來るを待つ日の朝のたわなる雪  
 雪ふれば古錦繪の思はれぬ江戸の男女のはた思はれぬ  
 東京へ赤きひとでの貝なごを女の持てこし師走雪の日  
 雪の日や鼓を打てる家ありて番町かなし二階のかなし  
 雪の日は雨にまさらず背桐の幹むくつけくなりけるかな  
 椿の木おはぐる色をするゆゑに見じと思へるわが庭の雪  
 雪ふれば子らのつくりし小だらひの池も初めて池ごころする  
 菜の畑に降れる雪見て冬の日もいとなつかしきものと思ひぬ

顔 與謝野晶子

二六

うらさびしはかなしと云ふ言の葉を初めて文字にか  
くこころする

うつろひの世の物語してまじとわれおとなしき娘が  
ひなにてぬ

戀ならぬ外の思ひのその中のもとも苦しき思ひなり  
けり

いとさちになつかしげれど相見むとさらに思はぬ人  
のまほろし

ただ一つ戀にあらざる戀しぬと眞白き夢をかたばら  
に立つ

生死かきこの種と思へる戀をよきもの哀れを一つつくり  
ぬ

戀ならず仇にあらて友とけりもわすれがたき人にも  
あるかな

戀なられば初めもばてもなきことなほかなきことに  
思はるるかな

人見るを思はざらむと念ずればと玉のこころ緑くな  
りぬ

あさましく上にふるへてその下に縮かかくせる我身  
なりけり

目見開きばはな混濁と目を閉ぢて擦り合はんため戀を  
こぼすれ

岩のごと戀を一つのかたまりになして見るまへにく  
からぬかな

何方へ行くと心を問ふこころまた我になし死なば死  
ねんし

逢はんとて文を見合とも思はずと云ひもて行けばだ  
だの唯事

わがこころ繪のこころして思はるる心なれども歌に  
ぼさる

④「黄なる花」(大阪毎日新聞) (大正三年一月二三日)

# 黄なる花

與謝野晶子

醒むる期も醉へる長さも悪人のわれ  
は初めに知りなきな皆

子の叩く太鼓の音のなかにして古への  
夢忘れかねつも

自らを慰め得ざる哀れなる末の日子  
しもなりにけるかな

霜降るや十一月に黄なる花咲く雑草  
のあはれなりけれ

くわさ黄なる蝶の飛び来ぬ病室の硝子障子の外の悲しさ

夜も世も傷ましきもの湧きいづる心  
は心誇はほこり

静なる風のながれの心地よき十一月  
の黒檀の夜

戀人はかりそめごころを語らへる時に  
も二人死なんご思へる

わが鏡君を憎むさかすかにも慄ふ心  
を覗く日うつる

わがために物を思へご君がため物を  
思へごはかなまぬかな

おわりに

前稿を承け、倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収の与謝野晶子自筆歌稿の内、原稿用紙四枚に記載された短歌作品四〇首について、初出・歌集等と比較し、所収状況・異同を確認した。大阪毎日新聞社に勤めていた薄田泣菫に宛てられた原稿と推測されるが、「大阪毎日」の紙面に確認出来たのは、四〇首の内、二九首である。

【図版1】一〇首は、【①】「鬱金の公孫樹」(「大阪毎日新聞」(大正二年一月一日)に九首が掲載、紙面掲載の都合上か、最後の一首が掲載されていない。

【図版2】一〇首は、【②】「初雪」(「大阪毎日新聞」(大正二年二月二日)に総て掲載されているが、歌集には収録されていない。初出とルビの仮名遣いに数か所の異同が認められる。

【図版3】一〇首は、雑誌「我等」(大正三年三月)掲載の「顔」一五首の内、五首が含まれ、『さくら草』(前掲)に一首が所収されている(『全集』には初出が示されていない)。残り四首の内、一首は、異同に「参考」として示したように、「顔」(前掲)に類歌が認められるが、三首は、初出が不明で、『全集』未収録である。

【図版4】「歌」(「黄なる花」)は、大正三年一月二二日付「大阪毎日」に、「黄なる花」と題して一〇首全てが掲載され、内四首が『さくら草』に所収、六首が『全集』の「拾遺 大正二年」に確認出来る。自筆原稿・初出・歌集掲載歌で、表記・仮名遣い等僅か

に異同が認められる。

旧稿において「泣菫文庫」所収の晶子自筆歌稿に『全集』未収録歌が含まれる可能性について継続的に紹介してきたが、今回の四枚の自筆歌稿についても、以上計四首(類歌がある一首も含めるならば五首)の初出が不明で、『全集』未掲載であり、未公表短歌である可能性を指摘し得る。今後、「大阪毎日新聞」その他の掲載紙・誌において、現在『全集』に網羅されていない初出が確認される可能性に期待している。

以上、倉敷市所蔵「薄田泣菫文庫」所収の与謝野晶子自筆資料の内、吉備地方文化研究所による調査・撮影後に保管されていることが、倉敷市文化振興課において確認された資料を「補遺」として紹介した。「泣菫文庫」を保存・管理する倉敷市文化振興課及び関係各位に重ねて御礼申し上げます。

